

礼
ら
い
は
は
拝令和4年8月29日
4号

親切にして相互協同の精神

集団生活へ自主的に参加しよう(九月の目標より)

先週の始業式から第二学期が始まりました。九月の最初には学園祭に向けた様々な取り組みが行われ、変則的な時間の中の生活となります。中学生は探究学習のプレゼンテーションに向けた準備の時間として、綿密に、計画的に進めていきます。高校生はクラス発表の造形物作成など、皆が協力して素晴らしい作品を完成させていきます。また、今年度は数年ぶりに「舞台部門発表会」がロームシアター京都で開催されます。発表に関わる部活の皆さんは、その準備も同時に行わなければなりませんので本当に大変な時期になります。周囲の皆さんもぜひとも応援をして頂き、今年度の思い出に残る

舞台になればと願っています。

さて、本日の宗教礼拝は、お釈迦さまの教えの中から「たとえ話」をまとめて作られた「比喻経(ひゆきよう)」という經典からお話を一つ紹介します。

昔、インドに、Aさんという目の不自由な方がいました。ある日、Aさんは久しぶりに友人のBさんのお家を訪ねて、楽しい時間を過ごしました。ふと気が付くとすっかり夜になっていて、あたりは真っ暗になっていました。Aさんはあわてて帰ろうとしました。Bさんは、「夜道は危ないから、気をつけて帰りなさい。」と、提灯(ちようちん)を渡そうとしました。するとAさんは、顔を真っ赤にして怒り始めたのです。「目の不自由な私に提灯が必要だというのか。悪い冗談はやめてくれ。」と、その怒りは相当なものでした。しかしBさんは、「あなたにとって提灯は必要では無いかもしれませんが、しかし、相手の人がAさんに気づかずにぶつかってくると危ないから、持つて行きなさい。」と言いました。その言葉にAさんは納得し、Bさんにお礼を言っ素直に提灯を持って帰ったという事です。このお話を通じて何を教えようとしているのでしょうか。

目の不自由なAさんにとって、提灯は

必要のないものですが、目の見える人にとっては必要なのです。自分自身の生活に照らし合わせて考えてみてください。日常生活を送るために、たとえ自分には必要なものであったとしても、他の人には必要なものが数多くあります。例えば部活のことを例に考えてみてください。それぞれの部活に必要な道具や施設はそれぞれ異なります。自分にとって必要がないからと言って、人のものを粗末に扱ったり施設を正しく使用しなければ、必要とする人にとっては本当に悲しいことです。私達は、どんなささいなことでも相手の側に立って、必要・不必要を考えてみることも大切なことではないでしょうか。もちろんそれは、品物だけではなく、笑顔や言葉、接し方や考え方など、様々なことが考えられます。

これから文化祭や舞台部門発表会の準備が始まります。一所懸命に取り組みしていきます。そんなときこそ自分の考えだけが正しいと思わず、一度相手の立場に立ってみてはいかがでしょうか。お釈迦さまのお話しは、二千五百年という気が遠くなるような長い時間が経った今も、私達に本当に大切な心を教えて下さっているのです。親切にして相互協同の精神を具体化していきましょう。